CARILLON カリヨン

日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学 学報

Contents 目次

防災への取り組み

■災害救護訓練 …… 2
■日本赤十字社支部合同災害救護訓練 …… 3
■訓練の概要 …… 3

防災キャンプ・リポート …… 4〜7

介護福祉学科1年	阿部　梨々子	介護福祉学科1年	青葉　麻佑子	介護福祉学科1年	庄司　栞
介護福祉学科2年	門脇　歩	介護福祉学科2年	奥山　香菜子	看護学部看護学科3年	木村　奈津美
介護福祉学科2年	渡邊　佳菜子	介護福祉学科2年	安田　舞	介護福祉学科2年	佐藤　悠太郎
看護学部看護学科3年	加藤　有華	介護福祉学科1年	平川　和真	介護福祉学科2年	武藤　桃子
介護福祉学科1年	金田　恵実	介護福祉学科1年	深浦　由香	看護学部看護学科2年	伊藤　百花
介護福祉学科1年	進藤　悠奈	介護福祉学科1年	熊谷　勇人	介護福祉学科2年	小山田　翔子
介護福祉学科1年	高橋　みなよ	介護福祉学科2年	菅原　留美	介護福祉学科2年	佐々木由惟菜

■防災キャンプ・こどもサマーキャンプの概要 …… 7

■学生たちの体験に期待　日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学　学長　安藤　広子 …… 8
■故郷の災害に感じたこと　看護学部看護学科教員　情報・広報委員会委員長　高田　由美
■いのちを守る力を身につける ～暮らしの中の防災～　介護福祉学科教員　及川　真一
■災害ボランティアに参加して　看護学部3年　古農修一郎

2014 No. 4

カリヨンとは：（フランス語：Carillon）教会の塔などに吊り下げられる音程を異にする多数の鐘。16世紀以来、特にフランドル地方（現フランス領）で発達し、自動装置を持つものもある。赤十字の理念より「人道・博愛・奉仕」を3つの鐘に投影した本学のシンボルとして、平成8年の短大開学時に設置された。これにちなんで本学学園祭も「カリヨン祭」と呼ぶ。

JAPANESE RED CROSS AKITA COLLEGE

VOLUNTEER

日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学

防災への取り組み

災害救護訓練

真剣に考える時間

介護福祉学科２年
平糠　優花

私は、応急処置班として緑色のトリアージタッグをつけた傷病者のエリアを担当しました。緑色は、自分で歩ける軽度の傷病者を意味しますが、身体の傷の手当てが済んでも傷病者の心の傷は続いています。傷病者の中には、災害により家族を目の前で亡くされた方、最愛の子供の安否が不明なままご自身も傷を負われた方がいるかもしれません。そのような方々に対して、自分にどんなことが出来るのか。真剣に考える時間をいただいた訓練でした。

日頃からの訓練の必要性

介護福祉学科２年
佐藤悠太郎

近年、東日本大震災をはじめとし、広島の豪雨による土石流や御嶽山の噴火など、たくさんの災害が起きている。突然起こる災害の中で冷静に物事を判断するには普段からの訓練が必要である。このことを、災害救護訓練を通して学んだ。トリアージで最大多数に最良の医療を提供するには、身体が自然に動くように平時の訓練を繰り返し行い有事に備えるべきである。傷病者に対しての対応はトリアージの技術だけでなく、不安を軽減できるような言動も重要であると感じた。

トリアージに学ぶ

看護学部看護学科教員
新　沼　　剛

本学の災害救護訓練は、今年で第６回目を迎えた。私は主にトリアージエリアの運営責任者の立場で、トリアージ班並びに搬送班の学生の訓練活動を間近で観察する機会を得られた。

午前中、トリアージ班の学生は症例カードを用いて練習を行っていたため、傷病者を的確に篩い分け（重症度別に「赤」、「黄」、「緑」、「黒」に区分すること）できている印象であった。

死亡群の「黒」の傷病者のトリアージが後回しになっていたり、搬送班とのコミュニケーションが円滑に行われなかったりする等の課題が残ったものの、訓練終了後の振り返りの時間に、トリアージの優先順位や救護活動におけるリーダーシップの重要性について理解を深めることができた。

日本赤十字社支部合同災害救護訓練

看護学部
看護学科1年
長田　優嵩

私は今年初めて、日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練を見学しました。赤十字の活動は今までメディアや学校での授業で学びました。それを、実際に訓練という形でみて、迅速にトリアージを行い、円滑に本部と連携して行動する日本赤十字社の方々は私にとって尊敬に値する人たちでした。約4年前に発生した東日本大震災でも、すぐに被災した場所に向かい負傷者の手当てや救援物資の提供などを行ったと知りました。私は災害が発生してもいち早く駆けつける行動力に感銘を受けました。もし、自分が看護師として今回の訓練に参加しているならば、動けなかったと思います。有事の際、救護できるように訓練を行われているので、私も違った形で普段から訓練で学んだことを活かしていきたいと思います。また将来、尊敬する赤十字の人と共に働くことができたら良いなと改めて思いました。

看護学部看護学科教員
永易　裕子

第一ブロック支部合同災害救護訓練では、介護福祉学科の学生約20名と防災ボランティアの役割を担った。学生たちは、私が声をかける前に全員で円陣を組み、被災者への接し方を話し合ったり搬送の基本技術を確認したりしていた。1回目の実施が終わると自主的に集合して振り返りを行っていた。その甲斐あってか、2回目はより臨場感が増した実り多い訓練になった。石巻赤十字病院看護部長の金愛子氏も災害救護訓練の重要性を説いているとおり、本学が一丸となって訓練に取り組むべきことを、この学生たちの姿をみて改めて実感した。まずはできることから！災害救護訓練を企画運営する赤十字地域交流センターの一員として、今後の訓練のあり方を検討し、より充実させていきたい。

看護学部
看護学科2年
大野明日香

私は、日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練で、容体が急変した親を心配する避難住民の役でした。地域の方々に交じって避難所で医療スタッフを待ちました。やっと診てもらっても、搬送を必要とする重体の場合、今度は救急車を待ちます。待っても待っても救急車が来る気配はなく、家族の容体は悪くなる一方で、心配は募るばかりでした。そんな時、私を心配して、私の目を見て手を握ってくださったスタッフがいました。その方は救急車が来るまでずっと私の手を力強く握り、声をかけてくれ、傍にいてくださいました。その行為によって私の中にあった不安や心配が少しずつ和らいでいきました。

話を傾聴することはもちろん大事なケアの一つだけれども、ケアというのはそれだけではないのだなと、この時思いました。ただ手を握って傍にいてくれるだけで、とても心が軽くなるものだと感じました。災害救護において、心のケアは必須です。自分が救護の側に立つとき、今回の経験が被災者を想う上で重要になってくると思いました。

事務局
三浦　崇

私からは装備の変更についてご紹介です。

救護所等では、フレーム組立が不要で素早く展開できることから、組立式からエアー式へ移行されていた所ですが、風に弱いという点があり、現在はドラッシュテントが主流となりつつあります。ドラッシュテントは、風や耐熱性、遮光性に優れたフレーム一体型のテントで、なんとエアコンも設置できます。自衛隊やアメリカ陸軍でも使用されているので、興味のある方は調べてみてください。

日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練

開催日時：平成26年9月26日㈮・27日㈯
主 会 場：日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学キャンパス・秋田赤十字病院構内　他

二日間にわたり、本学を主会場として、日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練が行われました。この訓練は、日本赤十字社第一ブロック（北海道・東北）の赤十字救護班や防災ボランティアの方が参加して毎年行っている訓練で、今年は秋田県で開催され、約200名（学生を除く）が参加しました。

今回の訓練は、東日本大震災の混乱した現場活動で課題となった「指揮命令系統」について学習することを大きなテーマとし、一日目には図上訓練や講義により、指揮命令系統における基本事項の確認が行われました。二日目には、指示に基づいて情報共有をしながら系統だった救護活動を行うことを目的とした実動訓練が行われました。実動訓練には、災害対策本部運用訓練、防災ボランティアセンター運用訓練、医療救護訓練、避難所におけるこころのケア活動訓練等の内容が含まれ、午前中に2回訓練を実施しました。

この実動訓練に、看護・介護学科2年生の約160名が被災者役とボランティア役で参加し、その他の学年は現場救護所の医療救護訓練を中心に見学しました。訓練を通して、災害時に日本赤十字社の果たす役割、被災者の身体的心理的状況を理解や救護者としてのあり方、ボランティアの果たす役割を理解することを目的としていました。実施後の振り返りから、学生はこの目的を達成し、多くのことを感じた貴重な経験となったようでした。

文責：柏木ゆきえ

災害救護訓練の概要

開催日時：平成26年9月25日㈭　8:30～17:00
開催場所：日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学キャンパス

日本赤十字社（以下、「日赤」）は、日本赤十字社法に基づき、災害に備え、常時、救護員を確保する責務を負っており、日赤の看護師等養成施設の1つである本学では、その責務の一端を担い、救護員に必要な基礎的能力を備えた看護師・介護福祉士を養成するために、平成21年度から年に一度、全学生が参加する災害救護訓練を行ってきました。

本学の災害救護訓練は、災害時に行う救護活動の全体像を理解できるよう、トリアージ、搬送、応急手当、こころのケア等の傷病者に対する直接的なケアだけでなく、テント設営、通信伝達、炊き出し、集結訓練等の非医療的な活動も体験できるように構成されています。1年次生は、2年次以降の訓練で傷病者やその家族の身体的・精神的苦痛に配慮した活動が行えるよう、傷病者役や家族役を体験します。2年次以降は、学年が進むにつれて、より難しい役割が与えられ、最高学年までに救護活動に必要な技術を網羅的に体験できるように構成されています。さらに少子高齢化という社会の構造変化に対応するため、高齢者や障がい者等の災害時要援護者にも適切なケアを提供できるよう、避難所支援の訓練も行っています。

このように幅広い活動が行われる救護の現場では各役割間のコミュニケーションと連携が重要です。災害救護訓練では、単に知識や技術を習得するだけでなく、救護活動に必要なリーダーシップやチームワークについても学習します。

文責：新沼　剛

Camp Report

介護福祉学科1年
阿部梨々子

『なかまの大切さ』。今回の防災キャンプでは、この言葉の意味を深く知ることができました。寝床づくりから始まり、水を作ったり炊き出しをしたりと、一人ではなく、みんながいることで味わうことができる達成感や充実感をたくさん感じました。２度合わせてたった4日間の防災キャンプでしたが、何倍も何十倍も大きくなることができたと思います。子供たちの笑顔をこれからもひきだしたい、また防災キャンプに参加したい、そう思える防災キャンプでした。次回も参加したいと思います。

介護福祉学科1年
庄司　栞

防災キャンプでは、水作りや火起こし、炊き出しなど様々な役割がある中で、私はプラダン作りを行いました。最初は使い方すら分からず苦戦しましたが、皆が協力して案を出し合い、団結力を感じる事ができました。こどもサマーキャンプでは、最初は不安げな表情だった子供達が段々と無邪気な笑顔に変わっていく様子が印象的でした。遊びの中で自然災害の恐ろしさや他人への思いやりをもつことの大切さを学ぶ良いきっかけだったのではないかと思います。子供達だけでなく私も多くの知識を得る事ができたので、参加して本当によかったです。

介護福祉学科2年
門脇　歩

今回の防災キャンプではろ過装置作りを担当しました。資料のとおりに実行しましたが、なかなか上手くいかず、頭を悩ませました。しかし、周りの友達と意見を出し合ってくり返すうちに、水がろ過されるようになり、後日行われた「こどもサマーキャンプ」でも子どもたちにコツを教えることができました。他にも、防災グッズの使い方を教えたり、質問に答えたりしているうちに、自分自身も改めて防災についての知識を再確認でき、防災についてさらに考えさせられる、いいきっかけとなりました。
石巻では、住宅地が空き地になり、建物には波の高さを記す線が刻まれていて、復興はまだ完璧にされたわけではないことを知りました。自分の身の周りや地域で災害が起きたとき、少しでも今回の防災キャンプで得た知識・技術を生かしたいと思います。

介護福祉学科2年
奥山香菜子

私は今年初めて防災ボランティアに参加しました。火を一からおこすことや、汚れた水を飲料水にすることはマニュアル通りにはいかず皆で試行錯誤しながら作業していました。皆で「これでいいんじゃない?」等と会話をしているうちに、自然に協調し合う関係が生まれていったように感じます。様々な経験、また多くの人との関わりを通して以前の自分よりは少し成長できたように感じます。

看護学部看護学科3年
木村奈津美

被災地を実際に訪れてみて、津波がどこまできたのか、被害がどの程度だったのか実感することができ、その後の復興や防災対策などについても考えることができた。
防災キャンプでは災害時を想定して限られた資源で、生きるために必要なものを作ったり、苦しんでいる人、困っている人を助けるために何ができるかを考えるよい機会となった。こどもサマーキャンプで、その経験を小学生に伝えながら一緒に学ぶことができ、仲間と協力しながら自己の成長につながったと思う。

介護福祉学科1年
青葉麻佑子

防災キャンプでは、被災した時の地域の状況を実際に再現して行いましたが、何をするにも時間がかかり、大変だと感じました。寝床を作ったり、炊き出しをしたり、水をろ過するなど役割を分担して協力して行うことができました。しかし、実際のことを考えると被災地では、なかなか物事をスムーズに進められず、言い合いになったりしていたと思います。こどもサマーキャンプでは、子供たちも一緒に防災キャンプで行ったことを教えながら行いました。このキャンプで水や火、電気の大切さを改めて感じました。

介護福祉学科2年
渡邊佳菜子

防災キャンプを通して、避難所生活の大変さを知り、いのちを守るための防災の知識について身につけることができました。私は主に、段ボールを使った生活づくりに携わり、そこでプライバシーの保護について着目することができました。実際の避難所では、見ず知らずの者が隣同士となり、しばらくの間、共に生活することとなります。そのなかで、特に女性への配慮が必要となるのではないかと考えました。他にも火や水をつくったり、炊き出しを行ったりと多くの体験をしましたが、いのちを守るためには、そのような知識を持ちつつ、気づいて考えて行動することが大切なのだと学びました。

介護福祉学科２年
安田　舞

防災キャンプ等に参加し、災害が起こった際に自分たちが積極的に行動してどのように対応するべきなのかということを学ぶことができました。
実際に、ろ過装置を使って水をつくることや寝泊りする為にプライベート空間をつくり、少しでもストレスをなくし安心感を与える環境をつくることも大切なことだと感じることができました。また、実際に自分たちが体験することで被災した時を想定しながら考えることができ、災害時にはこの学びを活かしていきたいと思いました。

介護福祉学科１年
平川　和真

今回の防災キャンプを通して、災害の際に自分の命は自分自身で守り、そのうえで他者の命も守っていかなければならないということを感じた。そのためには、災害時に活用できるさまざまな技術を身につける必要があると思う。また、一人で活動するよりもチームとして活動することの大切さを知ることができた。
飲料水を作ること、火をおこすことそして食料の大切さを頭で理解することはもちろん、体で理解することができた。現代では食料も物も溢れていてこのような体験をすることはなかなかないと思った。今回の防災キャンプは被災時の痛みを一部にすぎないが体験し理解できた。また、震災時に役立てられる技術も身につけられた。この防災キャンプをたくさんの人に体験してもらい、震災時の知識を深めてほしいと感じた。何よりも楽しんで参加できたことが、良き学びへと繋がったのだと思う。

介護福祉学科２年
佐藤悠太郎

今回の防災キャンプでは、避難所体験、生きるための技術の獲得や被災地訪問を行いました。自分は、東日本大震災の時秋田にいて停電を経験しました。光の無い怖さやストーブがなかったのでとても寒かったということを今でも覚えています。また、避難所はテレビを通して見たことはありましたが当然生活をしたことがないため、まったく想像のつかないものでした。今回実際に自分たちの力で体育館に避難所を設営して一日過ごしたことで、被災地の生活までとは及びませんが体験することができました。実際に体育館の中で生活してみると足音やちょっとした物音が響いて気になり、この生活が何日間も続くとなるとストレスを感じてしまうと思いました。隣の人との距離も近く見知らぬ人が隣だったらと考えるとプライバシーを守るように仕切りなどを活用する必要があると思いました。避難所設営の他に水のろ過器の制作や炊き出しを行いました。参加者でどうしたらより使いやすくなるかなど考えを出し合いながら行うことで完成させることができました。身近にあるもので作るということがとても大切なことだと思いました。
今回の防災キャンプでは、もしも自分が被災したらということを考えて取り組むことができ良い経験となりました。どの場面でも、参加者同士の協力や考える姿勢が大切だと強く感じました。これからも、この防災キャンプを通してより多くの人に防災への意識や技術を学んでもらえるように継続してほしいと思いました。

看護学部看護学科３年
加藤　有華

この防災キャンプでは、「水や火の大切さ」や「人と協力することの大切さ」を学んだ。
人が生きていくためには、水や火が必要である。災害が起き、ライフラインが遮断されたとき、自らの手で水や火も作らなければならない。水や火の作り方など今まで誰も教えてくれなかったし、自分でも学んだことがなかった。災害時、生きていくために必要なのは、このような力だと感じた。自分には、まだまだ付加能力が足りないと思う。受け身になっていないで、自ら学び、災害時に自分の命、人の命を守れるような人間になりたい。
また、この防災キャンプでは、物品だけ渡されて、「あとは自分たちで考えて何とかして」という指示しか出されなかった。たくさん悩み、みんなで考えを出し合っていく中で、人と協力することの大切さを学んだ。団結して何かを成し遂げようとするときの力はものすごいと感じ、人と協力すること、人と話すことがますます好きになった。
こんなに学んで、尚且つ、こどもサマーキャンプはとにかく楽しかった。同じ意志を持った仲間たちと元気いっぱいの子供たちと一緒に、いろんなことに悩んで、迷って、考えて、試して、成功したときに大喜びして…たくさんの刺激を受けた。防災キャンプのおかげで参加者全員がたくましく成長したと思う。

介護福祉学科２年
武藤　桃子

今回、防災キャンプへボランティアとして参加するのは２回目でした。
去年とは違い、学校を会場とした防災キャンプを計画するため学生同士での話し合いを重ねました。まず学生だけの防災キャンプを行い、こどもサマーキャンプに備えました。
また実際に被災地へ行き現地の方の話を聞くことで、防災キャンプのイメージを高めました。こどもサマーキャンプ当日は子どもたちが楽しみながらも学びを深めることができるプログラムを実施することができたと感じています。この学びと達成感を忘れず、今後の活動へも活かしながら頑張っていきたいです。

Camp Report

介護福祉学科1年
金田　恵実

防災キャンプに参加し、プラスチックダンボールで作った部屋で寝たり、炊き出しをしたり、普段の生活ではなかなか体験できないことを体験することができました。今回は、とても楽しく行うことができたけど、これが毎日続くとなったらとても辛い毎日だと思いました。もし今後、大地震が起こり、避難所で生活することになったとき、今回学んだことを活かし、少しでも他の被災者の方々の役に立ちたいと思います。来年も防災キャンプがあったら参加したいです。

看護学部看護学科2年
伊藤　百花

今回の防災キャンプのテーマは「命を守る」でした。支援が来るまでの間、自分たちはどのようにして命をつなぐのか。水、火、電気を作る方法を学びました。学生のみの防災キャンプではマニュアルにそって、水や火を起こしましたが、実際やってみるとマニュアル通りにはいかないことがあり、問題が起きるたびにメンバーと試行錯誤して解決していきました。今回の防災キャンプでは、自分の気づかなかったところを他のメンバーが気付いたりと、仲間から学ぶことが多かったと思います。こどもサマーキャンプでは、私たちがスタッフとなって命を守るための方法を教えました。子どもたちはとても元気で、初めてのことに興味深々でした。大勢の人と共に一日一日を乗り切るためには、みんなが協力する気持ちを持つことと思いやりの気持ちが大切だということを学びました。いつ災害に遭うかわからないからこそ、このような活動にはもっと積極的に参加していきたいと思いました。

介護福祉学科1年
進藤　悠奈

２つのキャンプに参加して、私は多くのことを感じ、学ぶことができました。学生のみで行われた防災キャンプでは、被災地の避難所のように体育館にプラスチックダンボールで仕切りを作り、床に断熱材のようなものを敷き、夜寝て過ごしました。たった一晩過ごしただけでしたが、小さな物音だったり、咳が響き、なかなか寝付くことができずにストレスを少なからず感じました。しかし、実際の避難所での生活は長期間であったということなので、身体的にも精神的にも大きな負担であったのだと思いました。その他にも水をろ過したり、火起こしや炊き出しなどをして防災に対する知識を深めることができました。そして、こどもサマーキャンプに今度はボランティアという立場で参加しました。参加した子供たちに水のろ過の仕方や炊き出しなどを体験してもらうことにより、自然災害の恐ろしさと防災の知識を伝えることができたと思います。

介護福祉学科1年
熊谷　勇人

東日本大震災では今まで経験したことのない揺れを経験し、多くの人の生活環境を変えた。震災で原発事故が起き、行動範囲がかなり制限された。被災地の人から見るとたいしたことはないかもしれないが、秋田でも震災で停電が起き、私たちの周りから「電気」が消えた。電気が消え、普段行っていることが出来ないだけでこんなにも不便と感じるのかと思った。しかし、震災から時間が経ち、電気があたりまえにある暮しの中で、自分自身当時のことを忘れかけてしまっていたように思う。そんな中こどもサマーキャンプに参加し、子供たちと一緒に沢山のことを防災について学んだ。電気を使う生活から少し離れてみることで電気のありがたさを改めて私たちも子供たちも知ることが出来たと思う。災害というのはいつ起こるのかだれも予測できない。防災キャンプなどの経験を通じて少しでも震災時に活かせるようにすることが大切なのだと考える。

介護福祉学科1年
深浦　由香

防災キャンプでは、体育館での生活空間作りを体験しました。段ボールをどのように繋げるか、どうすればプライバシーが保護されるかなど、ただ仕切りを作るだけではなく、少しでも生活しやすい空間を作ることが大切であるということを知りました。こどもサマーキャンプでは、参加した小学生が真剣な顔つきで頑張っていて、災害時に避難所でリードしていくことができるのではないかと感じることができました。

介護福祉学科2年
小山田翔子

防災キャンプを体験して、自分達で寝床を作るのが難しかった。どのようにして段ボールをくっつければいいのか、どのように組み立てていくかをみんなで考えて完成することが出来た。完成しても、どのような配置にすれば他の人に見えないかも考えなければいけなかった。見えてしまうところは仕切りを作り、少しでもプライバシーの配慮が出来たと感じた。非常食のご飯がいつもよりとても美味しく感じた。普段のご飯を食べる時よりゆっくり味わって食べていたのを覚えている。食料のありがたみを改めて感じた。石巻を見学した際、津波の高さを見てとても驚いた。想像以上の被害の大きさで胸が苦しくなった。現地を自分の目で見て、津波の恐ろしさを実感することが出来た。
こどもサマーキャンプでは、子どもたちと一緒に防災について楽しく学ぶことが出来た。日常生活で体験できないことをたくさん行ってきて、２日間で大きく成長できたのではないかと感じた。

介護福祉学科1年
高橋みなよ

防災キャンプに参加して、自身の知識が増えました。実際に炊き出しや、プラスチックダンボールを使って避難所などを作ってみて、「協力性」の大切さと「アイディア」の活用の必要性を感じました。今後大きな地震などが起こり、今回学んだことを活かせる場面があるときは、自分から進んで活動したいと思いました。来年ものこのような活動に参加して、自身の知識を増やしたいです。

介護福祉学科2年
佐々木由惟菜

私たちの役割はこどもサマーキャンプに参加してくれる子供たちに伝えることでした。そのためにはまず自分たちが学ぶ場として防災キャンプに参加しました。頭ではわかっていても実際に体験しないとわからないことや、体験したからこそ次に活かせる工夫などを学び、被災地訪問では一番被害が大きかった石巻市に訪れました。この防災キャンプで学んだことをこどもサマーキャンプの場で、真剣に、且つ楽しく、子供たちの思い出に残るようにするためにはどうしたらいいのかを常に考えながら接することを心がけました。参加してくれた子供たちが家族や友達にこの経験を通じて学んだこと、印象に残ったことなどを発信していってほしいと思いました。

介護福祉学科2年
菅原　留美

今回の防災キャンプで大変だったことは、夜間の睡眠でした。プラスチック製の段ボールを使い、プライバシーの配慮として仕切りを造りました。壁が薄いというのと、みんな同じ場所で寝ているため、周りの話し声や足音、寝ている時のいびきなどが響きわたり、しっかり睡眠をとることができませんでした。今回は近くに友達が居ることで安心感がありましたが、実際の被災所では見知らぬ人と隣り合わせになることが当たり前な状況であるため、その環境に慣れるまで多くのストレスを抱えているのではないかと感じました。
被災地である石巻に訪れた際、実際に津波が来た高さを示した柱が残されていました。その高さは6.9メートルもあり、周りの風景はほぼ平地で助かった家はなく、改めて津波の恐ろしさを知りました。被災した方たちは、自分の命を守ることに精一杯で、大切な人を失ってしまった悲しみ、また自然災害という避けられない事故で、住んでいた場所が一瞬にして崩壊してしまうという悔しさなどが今でも残っているはずです。
今回こういった訓練や被災地を見たことで、被災者の抱いている心情を理解することができ、どんなケアをしていくべきか考えさせられた現場実習でした。

避難生活を実践で学ぶ　～防災キャンプ～

本企画は、本学のサービスラーニング・プロジェクト事業の一環として、本学の学生51名を対象に、平成26 年6月21日(土)、22日(日)一泊二日で防災キャンプを実施しました。震災時のライフラインが途絶えた状況を設定し、「生きるために」「いのちを救う」「避難所生活を助ける」の3つのテーマに基づき、災害時に飲み水を確保する濾過装置や避難所生活を助けるための間仕切りシステムづくりなど、身の周りの物を使った「いのちを守る方法」を学びました。翌日は、宮城県石巻市を訪れ、被災地支援ツアーガイドから、東日本大震災発生の当時の様子を聞きました。

こどもサマーキャンプｉｎ秋田

秋田県在住の学童期のこども達を対象に「こどもサマーキャンプin秋田」。2011年8月からスタートし、今年で4回目の開催となりました。この活動は、東日本大震災の影響によって遊び場を失った、岩手県、宮城県、福島県在住のこども達と保護者を秋田に招いて、大自然の中で学校や日常生活では味わうことができない、海、山、川などの秋田県の大自然を体験できるプログラムを展開し、東日本大震災被災地支援活動として、現在も続けております。

本年度は、その多くの学びを与えてくれた大自然を理解し、「命を守ること」をテーマに平成26年7月26日(土)、27日(日) の一泊二日の日程で開催。参加者は、53 名(秋田県在住の小学校4 年生～ 6 年生)、学生ボランティア47名、市民ボランティア30 名、日本赤十字秋田県支部職員2名、本学教職員10 名が参加しました。事前体験(防災キャンプ) から学んだ本学の学生達が、こども達の指導者となり災害時における命を守る方法や救急法、水上安全法等の様々な防災プログラムを展開し「命の大切さ」を伝えました。

文責：及川　真一

カリヨン
No. 4
■発行日／平成26年12月17日　■発行／日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学
■編　集／日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学　情報・広報委員会　〒010-1493 秋田県秋田市上北手猿田字苗代沢17番地3　TEL.018-829-4000

学生たちの体験に期待

日本赤十字秋田看護大学
日本赤十字秋田短期大学
学長
安藤 広子

異常気象による暴風雨・雪や、地震、火山の噴火などの自然災害が各地で発生しています。そして、社会の人々の防災に対する意識も高まっているように思います。

本学は、国際的なネットワークをもつ赤十字の教育機関として、救護活動の教育に長い歴史をもっています。現在の防災関連の教育としては、災害看護学、災害福祉論、赤十字原論、赤十字概論、ボランティア活動論を開講しており、災害救護訓練は全学生・教職員の参加によって毎年行っています。また、課外活動として行われている防災に関するイベントやボランティア活動は、赤十字秋田県支部や地域の関連機関と連携・協働して開催し、自らの命と安全を守る「自助」と地域の人々の安全を守る「共助」をめざして展開をしています。

このような学生達の体験は、これからの生活の中で、防災に対する意識や行動に活かされ、また、時にはリーダーシップを発揮できるものと期待します。

最後に、本学の防災教育活動をご指導・ご支援いただいております多くの皆様に感謝を申し上げます。

故郷の災害に感じたこと

看護学部看護学科教員
情報・広報委員会委員長
高田 由美

私たち委員会の主な仕事は大学・短期大学の広報活動です。本学の情報をわかりやすくお伝えできるように本誌「カリヨン」の作成や、ホームページの管理などを行っています。

平成26年度、私たちは「災害と救護」を大きなキーワードとして特集を組み、学内の学生、教職員の活動をまとめてみました。いかがだったでしょうか。

ここ数年、自然災害の恐怖をまざまざと思い知る方も多かったかと思います。私の故郷でもある、最果ての街、「稚内（わっかない）」でも"50年に1度"の大雨による被害を受けました。稚内は秋田県内でも見られる風力発電がいくつもあり、年がら年中風が強い街で有名ですが、台風や大雪、地震とはほぼ無縁状態でした。私が高校生の頃、自然災害はテレビの映像で流れているものという感覚で過ごしていました。

引用元：http://www.souya.pref.hokkaido.lg.jp/

今回の北海道北部（宗谷地方）の大雨による土砂崩れで、礼文では2名の方が亡くなっています。安全な地であると思っていた北の果ての被害を知り、改めて安全とは、私たちが護るもの、維持させるもの、気の抜けないものだということを感じました。

いのちを守る力を身につける
～暮らしの中の防災～

介護福祉学科教員
及川 真一

日本の国土は豊かな自然に恵まれ、四季折々の美しい光景を目にすることができます。またその自然の恵みにより、これまで日本は発展することができました。しかし、自然は時には私たちに牙をむきます。地震、津波、台風などしばしば自然のもつ脅威にさらされ、大きな災害が発生することも少なくなく、そのたびに多くの人々が犠牲となりました。

防災とは、人に迷惑をかけずに、加害者にならないように、自分と大切な人が被害に受けないで、避難場所で生き残ることであると言われています。そこで、今年度より実施している防災キャンプでは、ライフラインが途絶えた状況を設定し、「命を守る」知識と技能を身につけることを目的に開催しました。この活動によって、多くの方に実践的な防災教育の必要性を伝え、家族が、地域が、偶然隣り合った人が共に助け合い、生き抜く一助になればと願っています。

災害ボランティアに参加して

看護学部看護学科3年
古農修一郎

東日本大震災の被災者の一人として、災害に対するボランティアに興味があり今回の災害ボランティアに参加することを決めた。その背景には、あの当時高校生だった私が力仕事をするほか何もすることができず、頭では考えていてもどのようなことを行えばよいのか行動することができず、もどかしさを感じていたことからである。

ボランティアの内容はサバイバルそのものであり自分たちで飲料水を作ったり、火をおこしたり、炊き出しを行ったりと自分にとってとても良い経験となった。もし、この体験をしておらずまた私の身近で災害が起こってしまったら、私はまた同じ過ちを繰り返したことだろう。恥ずかしい話だが、被災する前までは災害なんて自分には関係ないと思っていた。しかし、被災し世界各地からの支援やボランティアを受けて感謝の気持ちでいっぱいになり恩返しをしたいという思いになった。それ以来私は日本各地で起こっている災害について他人事のようには考えられなくなった。明日あなたの周りで災害が起きたらあなたはどのように行動することができますか？私はそのような場面に出会ったときの生きる術をこのボランティアで 学べたと思う。

人間を救うのは、人間だ。

赤十字の基本原則

人道	公平	中平	独立	奉仕	単一	世界性
Humanity	Impartiality	Neutrality	Independence	Voluntary Service	Unity	Universality

赤十字「白地に赤い十字」のマークは、人道上の偉大な提案者、アンリー・デュナンの祖国であるスイス国に敬意を表して、スイス国旗の色を逆にして決められたものです。

1859年6月、スイスの青年がイタリア統一戦争の激戦地ソルフェリーノにほど近いカスティリオーネという町にさしかかりました。そこで、戦争による悲惨な光景を目のあたりにした青年は、町の人々や旅人たちの協力を求め、傷病兵の救護に献身しました。「傷ついた兵士は、もはや兵士ではない、人間である。人間同士としてその尊い生命は救わなければならない」との信念に、青年は燃えたのです。

この青年こそ、赤十字の創設者アンリー・デュナンその人です。

このデュナンの訴えは、ヨーロッパ各国に大きな反響を呼びました。やがて、スイスのジュネーブに赤十字国際委員会の前身である5人委員会が発足し、1863年10月には、ヨーロッパ16カ国が参加して最初の国際会議が開かれ、赤十字規約ができました。そして、翌1864年8月には、スイスほか15カ国の外交会議で最初のジュネーブ条約（いわゆる赤十字条約）が調印され、ここに国際赤十字組織が正式に誕生したのです。

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

国境、宗教、民族を越えて
人間の生命と健康を守り、心を繋ぐ。
それが赤十字の営みです。

1965年（昭和40年）にウィーンで開催された第20回赤十字国際会議で「赤十字基本原則」が決議され、宣言されました。赤十字基本原則は、赤十字の長い活動の中から生まれ、形作られたものです。

「人間の生命は尊重されなければならないし、苦しんでいる者は、敵味方の別なく救われなければならない」という「人道」こそが赤十字の基本で、他の原則は「人道」の原則を実現するために必要となるものです。